

令和5年度 第6回学校運営協議会（学校魅力強化委員会）議事録

1. 期日：令和6年2月27日（火） 15：00～17：00
2. 場所：有田工業高等学校 会議室（管理棟1階）
3. 参加者：校長を含む委員10名（欠席3名）
事務局 12名（本校職員）
4. 会次第及び議事録
 - (1) 開 会
 - (2) 学校長挨拶
 - (3) 議事
 - ① スクール・ミッション／スクール・ポリシーについて
 - 全日制
 - ・スクール・ミッションについては、前回の学校運営協議会で承認いただき県に提出したところ、県から修正案が出た。議論していただいたところから大幅な修正が入り、学校としても戸惑っているところである。
 - ・スクール・ポリシーについては、法律に基づいて3つのポリシーを策定し、公表することになっている。
 - ・現在まだ議論中だが、資料で示したような形で策定・公表しようと考えている。
 - 定時制
 - ・定時制は全日制に倣って、全日制が策定したのち、定時制の実情に合うように形を変えていこうと考えている。
 - 意見：だいぶ変わっており、表現に明確さがなくなった印象を受ける。
 - 質問：県からの修正案が出たが、これに対して学校側から再修正はあり得ないのか。
回答（校長）：県としては「ほぼこれで行く」というスタンスであり、本校の設置者である県がこの形で示したため、これを追認することになる。スクール・ポリシーについては学校で策定することになっているため、学校主導で策定することができる。
 - 質問：このミッションを見ると、機械科と電気科は県から「いらぬ」とはっきり言われているような印象を受ける。機械科と電気科は何年後かになくなるのか。
回答（校長）：なくなるということはないと思う。機械科や電気科の方々がなおざりにされたという印象を受けるのではないかという懸念を県にも伝えたが、ミッションの提示が変わることはなかった。このご意見は県に再度伝える。
 - 質問：スクール・ミッションは、永続的になるということはないと考えるが、例えば中期目標の3ないし5年のスパンとなり、次のスクール・ミッションでは変更があり得ると考えてよいのか。
回答（校長）：年度ごとに替わるということはないが、時代も変わっていくので、変更はあり得ると思う。
質問：今後もこの学校運営協議下でも意見が出ると思うので、その中で修正案を提示する

というやり方ではどうか。

回答（校長）：校内の機械科や電気科の職員も先ほどのご意見のように思っている者もいると思うし、この学校運営協議会の場合でも出たということについても、県に伝えていきたい。

意見：ぜひ、強く伝えてほしい。

- 質問：「国内初の陶器工芸学校」という文言があるが、「陶器」でよいのか。勉脩学舎のことを言っていると思うが、「陶磁器」ではないのか。

意見：有田に来た当初、「陶器」というと「磁器だ」と注意された。これが有田の特徴ではないのかと思う。ですから、「陶器」ではなく「陶磁器」だと思う。

回答（校長）：県も文献等にあたって書いているようである。私がみた資料の中にも「陶器工芸学校」という文言となっているものがあるが、修正の可能性はあると考えている。

意見：有田の歴史民俗資料館の学芸員に問い合わせて確認してみてもどうか。

回答（校長）：県にも委員の意見として伝えておきたいと思う。

- 意見：定時制のスクール・ミッションに一番違和感がある。もっと『多様性』など生徒を受け入れる部分の文言が必要ではないか。

- 意見：県がこのようなミッションを策定した中でコンセプトを文章化して委員会の方に見せてもらえないか。

意見：すべての運営協議会に参加しており、どのような経緯で校内でミッションを策定したかについてはわかっており、それなりの議論を繰り返して積み上げてきた。これを最終段階で変えられてしまい、これだったら県が始めから作ればよく、我々は不要だったのではないか。

意見：今の意見からも、県のコンセプトをしっかりと見せて、どのように考えたかを文章化して見せてほしい。

回答（校長）：いただいた意見について、必ず県に伝えたいと思う。

- 質問：スクール・ポリシーのグラデュエーション・ポリシーについては、前回のスクール・ミッション案とほとんど変わらないようだが、スクール・ミッションを大幅に変えたから、元のミッションの文言をポリシーに書いたのではないかと考えたが、これは、スクール・ミッションが（県により）書き換えられるということがわかった前提で作ったのではないか。

回答（事務局）：学校側のミッション案には、文の最後を「学校」と統一して、このような学校を目指すということで策定した。グラデュエーション・ポリシーについては、ミッションにあるような生徒を育てるということで、「学校」を「生徒」に置き換えた。つまり、スクール・ミッションとグラデュエーション・ポリシーは同一時期にセットで作っている。

- 意見：カリキュラム・ポリシーについては何らかの形がグラデュエーション・ポリシーにつながっていくというのが大切な要素だと思う。この大元がスクール・ミッションであるが、ここのつながりがしっくりしていない。

- 質問：スクール・ポリシーについては、今後も修正の余地があるとのことだったが、委員からの意見があれば、修正は間に合うのか。

回答（事務局）：県への提出が3月22日となっているため、あと一月弱は議論の余

地がある。学校内でもきちんと練りあがっているわけではない。先日の職員会議で各科からのカリキュラム・ポリシーを見て、意見をもらっている段階である。3月の中旬くらいまでにご意見をいただきたい。

- 質問：スクール・ミッションがこれだけ大幅な変更があったということは、この3つのポリシーについても県から大幅な修正が求められる可能性があるのか。

回答（校長）：県もスクール・ポリシーについてはそこまで修正はしないのではないかと考えている。3つのポリシーの方が、より具体的に生徒に対して「このようなことをする学校なんだ」ということを示す材料にもなるので、スクール・ポリシーについては、学校の考えを優先してもらわないと困ると考えている。

ミッションについては、県の施策として県内企業への就職ということに力を入れているので、本校に対しても生徒が学んだ技術等を活かして県内に就職してほしいという思いを文言に組み込んでいるのではないかと考えている。

- 意見：学校なので、「教える」「教えられる」ということが色濃くなるだろうと思うが、地域みらい留学などもあり、今後地域全体で学校を応援しようと思うならば、地域の方たちとの関わり合い方についても文言に組み込んだ方が良いのではないかと。また、地域とのかかわりを考えるとき、生徒だけでなく先生たちにもぜひ関わってもらい、地域・生徒・教員の3者間の関りで生徒を育てていくという視点をもう少し組み込んでほしい。

② 学校評価最終評価について

○全日制

- ・評価がAでなくB（おおむね達成）となったものを中心に説明

- ・基礎学力の定着と向上について、本校では毎週基礎力テストを行っている。不合格者数をできるだけ減らそうと考えて取り組んでいる。定期考査や大きな学校行事の後に実施した場合に、不合格者数が多いという結果が出ており、なかなか不合格者の減少にたどり着かなかった点が反省点である。不合格者数が多いと全体の平均点も下がるので、もう少し生徒の意識を高める工夫が必要ではないかと考えている。

- ・業務効率化の推進と時間外在校等時間の削減について、勤務時間外勤務による上限の遵守は、全職員への啓発は行っているが、完全な遵守には至らなかったということで「B」評価となっている。

- ・県外からの入学者数と地域みらい留学の入学者数について、現在一般選抜の出願後の段階での見積りであるが、県外については昨年並みの数になるということがほぼ確定となっており、目標の増加には至らなかった。地域みらい留学の生徒に関しても、特別選抜の合格者が3名、一般選抜では志願者が出なかったため、目標の5名には至らなかった。

- 質問：先生方の業務改善のところで、中間評価では「業務の効率化は調整中である。」とあり、最終評価では「各科・分掌の業務効率化は継続中である。」とあるが、これは数値的なデータはあるか。

回答（事務局）：数値では現在出していない。各科、各分掌の主任・職員と連絡を取りながら、できなかったところについては、課題出しをして継続して改善を図っているところである。

意見：評価するのであれば、ある程度目標数値があって、それに対して何%ということがないと、なかなか評価し難いのではないか。

- 質問：教員不足であったり、一人の先生に負担がかかったりといったことが話題になっているが、そのような評価、例えば他の学校との相対評価などについては、どのようになっているのか。

回答（校長）：本校の他の学校と比べた場合の教員数については、法律に定められているので、他校と比べてもそれほど差はない。学校によっては途中で休職されたりする方が多い学校では、欠員状態が続いて、そのしわ寄せが来たりすることがある。本校では臨時的任用の講師を配置したりすることで賄っている。ただ、本校にもこのコラボレーション・スクールや地域みらい留学など他校にない独自のミッションがある。また定時制では「聴講生制度」という他校にない制度がある。また全定両方に関して「卒業制作展」を他の専門高校と比べて大々的に行っており、業務量については、多と比較しても多くなっているのではないかと考えている。その分生徒たちは学校に対して充実感を感じているかもしれないが、職員に対しては非常に申し訳ないと感じている。校長で何とか出来るのであれば、職員数を増やしたいところではあるが、この点については申し訳ないと思うと同時に感謝しているところである。

- 質問：地域みらい留学生の増加の目標に届かなかったことから「B」評価ということであったが、「本校を中学生にお勧めできる」と答えた生徒や教職員の割合がとても高いという印象である。特に93%もの教職員が「お勧めできる」と考えているのはうらやましい限りである。教職員や生徒がどのような視点で「お勧めできる」と考えているのかについて、詳しく教えてもらえないか。

回答（事務局）：アンケートについては、単体の質問項目だったため、ここからさらに深掘りした内容のデータはないが、このアンケートは年に2回行っており、7月実施よりも12月実施の方が割合が高くなっていることから、生徒がきちんと学校生活を行ったうえで数値が上がっているところがお勧めできる点の一つではないかと思う。また、保護者対象にも自由記述でアンケートを取ったが、本校の特長として、「生徒と先生の間が近い」や「先生が熱心に指導してくれる」といった意見が多数あった。また、資格取得について熱心な指導をしてもらい、取得できる割合が高いといった点や、地方の高校であるが大企業への就職も可能といった点も魅力という評価をいただいた。

回答（事務局）：ものづくりを通して生徒たちが成長する過程をサポートできる学校という点が一番お勧めできる点だと思う。特に3年生になって取り組む卒業制作展に対する生徒の熱の入れ方は本当にすばらしく、こちらが生徒に教えるための知識や技術をさらに向上させなければならぬと感じる。また、課題研究発表会において取組の達成感を自分の言葉で伝えてくる生徒が多く、ここも魅力に感じている。

回答（事務局）：デザイン科でいうと、芸術科ではなく、工業科の中のデザイン科なので、ただ絵を描く、作るということよりも「人に関わる」ところに学びの原点があるということが大きく芸術科と異なる。課題研究では地域の中に出て、現実の中で活動することで自分たちの学びを昇華させていくことができるということが魅力ではないか。

○定時制

- ・最終評価についてはすべての項目で「A」をつけた。
- ・全校生徒が40名程度で、そのうち中学校時の不登校が38%、特別支援等の配慮を

要する生徒が 23%である。このような生徒の集団であるが、出席率 90%を目標に掲げて取り組んでいる。数年前は出席率が 90%を割り込んでいたが、教員間の情報共有を密に行い、生徒それぞれの出席状況を把握し、生徒に応じて励ましたり、寄り添ったりして関わることで、学校を居心地の良い場、自分たちの居場所となるようにやってきた。この結果現在では 94%の出席率になった。

・授業に対しては、なかなか学習に向かうことができなかったが、勉強することの楽しさを感じるようになってきたという生徒も出ている。定時制の特長である少人数による指導を活かし、個別の対応ができることで、学ぶことの喜びを感じることでできる生徒が増えてきている。有田工業の定時制はそのような子どもを伸ばすことができる学校であると自信を持って言える。

・就職については、今年度は 13 名の卒業生のうちすべての生徒が就職を決めている。就職先も、地元の陶磁器産業の企業 4 社に就職内定をいただいた。セラミック科の生徒は高校に入って初めて陶磁器の勉強をするという生徒もいるが、そのような生徒も卒業後に焼き物に関わりたいという気持ちを持っているというところでは、就業意欲も学校生活の中で培ってきているのではないかと考えている。

・これらのことから、学校組織として生徒を育てることが十分にできているのではないかと考えている。このためには教員も楽しく仕事をするということも大切であり、勤務時間と休憩時間の切り分けを明確にし、また、勤務終了後に残らないでいいように放課後の時間を年度途中から多めに確保した。このことで生徒の指導がしやすく、勤務終了までに十分仕事を終えて帰ることができるような環境づくりができています。

・新入生に対する関り方は、特に丁寧に対応を心掛けている。また、少し時間がたって慣れてきたと感じる生徒に対してはアルバイトを紹介して卒業後の進路実現につなげていくことができるような形で対応している。

- 質問：中学時代不登校の生徒が少なくない中、出席率が 90%を超えているのは非常に興味深いですが、具体的にはどういうことが効果的なのか。

回答（事務局）：一番は朝が苦手な生徒が、夕方からの登校で学校にゆっくり気持ちの準備を整えて行けるということが挙げられる。また、欠席したとしても「どうして休んだのか」というような聞き方でなく、「きつかったね」などというように寄り添い、休んだ背景について教員間で共有する。また、生徒への声掛けの仕方も生徒個々の状況に応じて工夫している。学校に顔だけ出して帰ったり、一日保健室で過ごしたりする生徒もいるが、無理強いをしない。授業についても、教室に入れなかった場合には教科担当者が保健室まで行って授業内容の教材を届けたり、担任の先生が様子を観察して教科担当者に連絡したりと、タイムリーな形で連絡を取り合って即時対応をするような形にしている。とにかく、生徒が休むことになった背景について思いを巡らせながら生徒に関わっているところが、うまくいっている理由ではないか。

※ 最終評価については承認された。

③ SAGA コラボレーション・スクール事業評価について

- ・今年度の活動の主なものを資料で示した。
- ・特にデザイン科の課題研究は個人研究で多岐にわたって活動したため別紙で示した。
- ・学校運営協議会の中での意見で、「学校開放」や「地域学習の日」については実施、改善を行うことができた。
- ・コーディネーターについては、有田町での顔の広さを十分に発揮してもらい、顔つなぎなど様々な場面で活躍してもらった。
- ・コラボレーション・スクール事業については全般的にうまくいったのではないかと考える。
- ・全国募集や県外からの入学生の増加については、学校評価にも上げた通り数値目標に達していないこともあり、課題が残った。
- ・九州内の窯元のある地区の教育委員会や中学校、窯元の協同組合を回って説明やチラシの配布をお願いに上がったところ、興味を持ってくれた中学生が出た。
- ・プラットフォームの「地域みらい留学」に参画して全国募集の活動を行うことも一つの手法としてあるが、他の手法もいろいろと絡めながらやっていかなければならないと考えている。他の手法について研究をしなければならぬところは課題となった。
- ・令和6年度は全国募集の入学者が3名の予定であり、これまでの生徒から単純に3名増員となる。全国募集の生徒対応は担任、科、そしてコーディネーターでやっているが、来年度はさらにコーディネーターの負担が増えることが想定される点も、今後の課題となる。

- 意見：有田工業生には様々な場面で協力をしてもらった。大人にとっては、高校生の感性で様々な視点から展示をしたり、提案をしたりしてくれるため、そのような点でも SAGA コラボレーション・スクールの内容にふさわしい活動がたくさんできているのではないかと。

- 質問：今後も生徒の活動や、卒業制作展のような外に向けた展示会など意欲的に行ってもらいたいと思う一方、教員の負担が増えていくことも気になる。初めの運営協議会でも挙げた、特別人員のような、人員の増員を求めたいが、そのようなことは難しいのか。それともこの運営協議会で要望を出せば、可能となるのか。

回答（校長）：この学校運営協議会は委員の方から、より学校がよくなるための提案をいただく場でもある。人員の増員については県の予算の状況もあってなかなか難しいが、貴重なご意見として承りたいと思う。

・実はこの運営協議会の前日に実施報告書の新しい様式が県から配付されたため、もう少し加筆する必要が生じた。このため、新しい様式で報告書を作成したのち、メールにて委員の皆様へ再度提示し、修正・承認を得たい。

(4) 説明・報告事項

① 地域みらい留学の状況について

- ・令和5年度入学生については、セラミック科4名、デザイン科2名であった。
- ・地域の内訳は、埼玉県、東京都（2名）、広島県、福岡県、鹿児島県となっている。
- ・部活動は窯業研究部2名、美術部1名、吹奏楽部1名、野球部1名である。
- ・窯業研究部の2名が佐賀県の美術協会主催の展覧会（美協展）で入賞、入選した。

また、京都工芸大学校が主催する美術工芸甲子園で優秀賞を受賞した。

- ・セラミックやデザインとは関係がないが、第二種電気工事士に合格した生徒がいる。
- ・野球部の生徒もレギュラークラスで、九州大会出場を決める県大会の準決勝で逆転のタイムリーを放つなどの活躍をしている。
- ・留学生以外の生徒も検定にチャレンジする生徒が多いなど、他の生徒にも良い影響を及ぼしている。
- ・令和6年度入学生については、特別選抜で3名、一般選抜では志願者がいなかったため、3名でほぼ確定となった。
- ・3名ともセラミック科の男子。
- ・地域の内訳は、神奈川県1名、福岡県1名、大分県1名である。

- 質問：町の中に協力飲食店があり、ステッカーなども作成したと思うが、現時点で生徒は食べに行ったりしているかどうかの実績は把握しているか。

回答（事務局）：ステッカーについて貼付の協力をお願いするために、協力飲食店を一度回った。その際に例えばお替り自由や、大盛り無料などのサービスについてもお願いをしたところであるが、具体的にこれといったサービスを出していただけるまでには至っていない。飲食店の方々も他店のサービスの様子を見ながらされているようなので、もう一度回って協力要請をしなければならない方と考えている。生徒が食べに行ったりしているかどうかについては、把握できていない。

意見：日々改善等を行いながら継続してほしい。ただ、生徒の交通手段が自転車までであり、行動範囲が限られているため、遠距離にあるお店はなかなか行かないと考えられるので、例えば一度ツアー的な感じでお店に行ってみるといことも考えられるのではないかと。大人側からある程度積極的にはたらきかけない限り、実績は増えないのではないかと思う。

- 質問：今の1年生はどこに住んでいるのか。

回答（事務局）：現状は下宿1名で、ここはこれまでも他県から来た生徒の受け入れの実績のあるところである。またアパートに3名、シェアハウスに1名、あとはたまたま町内に祖父母の家があったことからそこに暮らしている生徒が1名となっている。

- 質問：受け入れの空き状況はどうなっているのか

回答（町）：新たに地域魅力化プラットフォームが運営するシェアハウスがあり、男子棟4名、女子棟4名で、町が斡旋するアパートに2ないし3名の空きがある。

② 地域連携について

- ・卒業制作展について、1,400名の来場があり、委員の方の中にも来場していただいた方がいる。ありがとうございました。
- ・デザイン科の課題研究の一環で行った映画について、上映会を行った。これはケーブルテレビでの放映もなされた。
- ・2月22日に、サガテレビかちかちプレスで地域みらい留学生について扱ってもらった。
- ・2月14日には県の教育長が来訪し、留学生と面談をした。
- ・吹奏楽部がアリタ・マシュマロ・クリスマスで、吹奏楽の演奏及び碗琴の演奏を行

った。

・国語の授業で防災を扱ったときに、町の担当者に出向いてもらって専門的な立場からコメント等をいただいた。

- 質問：映画について、上映会で鑑賞させてもらったが、別の機会にも上映されることはあるのか。お願いすれば上映は可能か。

回答（事務局）：現時点で計画として具体的なものはない。上映の機会があればやりたいということは監督とも話をしている。映画祭等に出品する計画もあり、この場合あまり多く上映をすると、出品要件を満たさなくなることがあるようで、ある程度の時期までは、上映をセーブしながらということになる。

③ その他

- 有田観光協会では雛の焼き物まつりというイベントを開催中で、その中で「チェキアルバムコンテスト」というものを行っている。これはチェキを観光協会から貸し出して、その場で写真を撮ってもらい、それをもとにアルバムを作ってもらおうということを行っている。若い方に結構人気があり、ぜひ有田工業の生徒にも参加をお願いできないか。若い方が有田をどのように切り取ってくれるのかとても関心がある。詳しくはホームページに掲載しているので、参加を促してほしい。参加は無料だが、チェキのデポジットのために2,000円と、住所確認のための身分証明書が必要となる。

- ロータリークラブの方で交換留学生を行っている。昨年は海外からの留学生が決まらなかったために有田からの一方通行の留学となった。来年度は海外から女性の留学生が来る予定である。有田工業にお願いすることになるかもしれないので、その際はよろしくお願ひしたい。

質問（校長）：留学生はいつからの予定か。

回答（ロータリークラブ）：8月からの予定なので、9月、2学期からの1年間となる。

(5) 諸連絡

① 令和6年度の学校運営協議会について

- ・委員について、次年度に向けてお願いをするかもしれないが、検討してほしい。
- ・任期については1年となっているが、再任は妨げないことになっている。

② UNTIL THIS LIGHTS UPについて（有田町より）

- ・佐賀大学地域デザイン学部の先生と、町の地域おこし協力隊の方とのコラボレーションでイベントが開催される。
- ・場所は大樽にある春陽堂で、3月1日（金）から3日（日）まで開催なので、ぜひ足を運んでほしい。

(6) 閉 会